

発行：株式会社リンク・インタラック
 担当：事業統括ユニット プロダクト開発グループ
 住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
 TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：info@interac.co.jp



外国語活動・外国語科でICTを効果的に活用する

関西大学初等部 東口 貴彰

外国語活動や外国語科でも積極的に実践していきたいICTの活用。関西大学初等部の東口貴彰先生は「ICTはコミュニケーションを豊かにするためのツール」であり、子どもたちの協調性や創造性を高めることができるものだと思います。今回、授業で使える効果的な活用方法や場面を5つのカテゴリーで紹介いただきました。試行錯誤により生み出された「新しい学びのあり方」から、ご自身の授業をより良くするヒントをつかんでいただければと思います。



東口 貴彰

関西大学初等部教諭、情報教育主任。
 Apple Distinguished Educator。主
 な著書に『小学校英語×ICT 楽しい!を
 引き出す活動アイデア60』(明治図書)『学
 級づくり×ICT 1人1台端末の普段使いア
 イデア55』(明治図書)等がある。

はじめに

1人一台、タブレット端末などのICT機器を子どもたちが活用できる時代。外国語科・外国語活動の中でもICTを効果的に活用して子どもたちのコミュニケーションをより豊かなものになりたいと考える先生は多いのではないのでしょうか。とはいえ、そのためにまずは先生自身がICTをどのような場面で、どのように活用するのが効果的かということを知る必要があります。

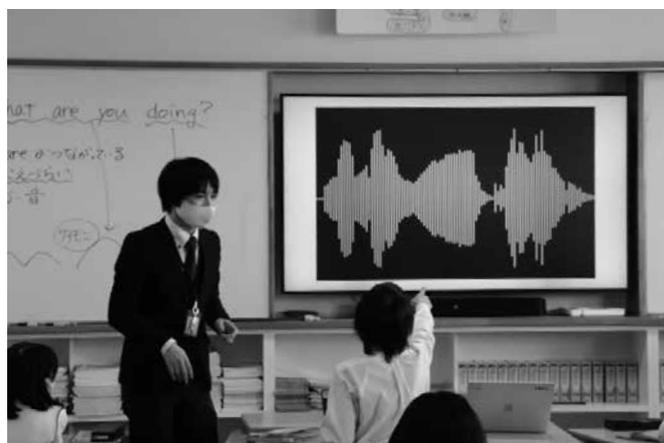
ICTを活用した授業アイデアを生み出すために最も重要なことは、先生自身の「経験」です。私自身も、最初から様々な授業アイデアが浮かんできたわけではありません。様々な試行錯誤をする中で、時として古い価値観のままICTを取り入れてしまい、学びの本質とのズレに気づいて違和感を覚えてしまったこともたくさんありました。しかしそういった経験を重ねてきたからこそ、改めて教育の本質と向き合い、ICTという新しいツールを活用した、新しい学びのあり方について深く考え、たくさんアイデアを生み出せるようになっていったのです。

そこで本記事では、私の経験とそれを通して変容してきた子どもたちの実際の姿をベースに、外国語活動や外国語科の授業におけるICT活用の効果的な場面についてお伝えさせていただきます。

コミュニケーションを豊かにするICT活用

外国語の授業において、私はICT=「コミュニケーションを豊かにするためのツールであり、それを活用することで主体性や協調性がより一層高まったり、創造性が育まれたりするもの」と考えています。無論、ドリル的な活動や、外国語を個人で学ぶ場面においては、これは当てはまらない場合もありますが(こちらについては後述します)、基本的にはICTというツールを媒介とし、子どもたち同士のコミュニケーションを豊かにさせることが、とりわけ初等教育では大切になります。そこで、初等教育におけるICTの効果的な活用方法や場面を大きく「提示ツール」「共有ツール」「発表ツール」「記録ツール」「通信ツール」の5つに分類してご紹介させていただきます。

①「提示ツール」



これは、主に教師がICTデバイスを活用して、子どもたちに画像や映像、音声、リアルタイムに収集したデータなどの様々な情報をスクリーンや子どもたちのデバイスに提示するという

活用方法です。拡大印刷では伝わらなかった多種多様な情報を効果的に提示することで、子どもたちの好奇心や探究心をくすぐることが出来ます。また、印刷の手間がなくなり、かつ音声データやデジタル絵カード、動画などのさまざまな情報を簡単かつタイムラグなしに提示することもできます。教師側にとってもメリットが大きいことから、私もまずはICTを「提示ツール」として使うことから始めました。デジタル教科書などにもさまざまなコンテンツがあるため、そちらを場面や状況・目的に応じて使ってみるところから始めても良いでしょう。

②「共有ツール」



子どものアウトプットしたものをみんなで共有することで、そこに自然な対話が生まれます。子どもたちの授業に対する目的意識が明確であればある程、子どもたちは共有した作品を見たり、自分の作品と比べたりしながら、自分たちの英語を捉え直すことができるようになります。そこで生まれた子どもたちのたくさんの気づきをもとに、より正しい英語表現を身につけたり、文法事項などを一般化したりすることで、子どもたちの英語表現の定着に結びついていくのです。また、ICTを活用して、その共有した内容やデータを即座に「生きた教材」として新たに提示することもできます。さらに、共有した内容をもとに、容易に共同作業をすることも可能です。例えば授業内ではなるべく英語の練習に専念し、プレゼンを作るなどの作業は個々にデータのやり取りをしながら家庭で進めることもできます。共有ツールとしてICTを活用することで、「45分という枠にとらわれず、学びたいときに学ぶ」「学級の枠に捉われず、どこでも共通の目的を持つ者同士で共有しながら学ぶ」といった、今までに物理的にできなかった新しい学び方のスタイルにも結び付くのです。

③「発表ツール」



ICTを活用することで、映像に残したり、スケッチをしたり、アプリケーションデザインをしたりと、学んだことをアウトプ

トする手段が格段に増えます。教室の前でみんなに向かって発表するというといった方法では、緊張してなかなか英語を発話しにくかった子どもたちも、ICTを活用することで、より主体的・創造的に英語をアウトプットできるようになります。なお、「発表」の手段は当然コミュニケーションの相手や場面・目的に応じて変化します。例えば、目の前にいる相手に対して直接訴えかけたい事柄については動画を見せるよりも、プレゼンテーションをする方が効果的でしょう。発表ツールとしてのICT活用については、学年が上がるにつれ、コミュニケーションの相手や場面・目的に応じて、子ども自らが自由に選択できるようにすることが大切だと考えています。子ども自らが相手意識を抱き、より良い方法を話し合いながら選択する力が身につくことで、それが豊かなコミュニケーションへの基盤となっていくのです。

④「記録ツール」



ICTを活用することで、様々な情報をデータとして保存できます。例えば、教室外にあるものを紹介したり、自分の趣味や習い事の様子を紹介したりといったように、ICTを記録ツールとして活用することで、教室という学びの場所の制約が取り払われるようになります。自分が本当に伝えたいものを友だちに伝えるという、言語活動の充実を図るためには、記録ツールはとても重要な役割を担っているのです。また、自分自身の英語表現を見つめ直すという意味でも、ICTを活用した記録はとても有効な手段です。自分がアウトプットした過去のデータを現在と比較することで、自己の英語表現の正確性に気付いたり、そこから次への課題につなげたりすることが出来ます。さらに、簡単に過去のデータを見ることが出来るため、積極的に既習表現を活用しようとする姿にも結び付きます。無論、子どものアウトプットのデータは教師とも共有しているため、評価をする際にもとても役立ちます。子どもたちの学びの軌跡をデータとして保存できることは子どもにとっても教師にとってもとても価値のあることなのです。

⑤「通信ツール」



最近では、離れた場所の相手であっても共に学ぶことができるようになりました。欠席者はもちろん、違う学校や海外の友だちなどと気軽に通信して学びを共にすることが出来ます。また、身近な相手であっても、例えば音声通話をすることで、視覚情報を意図的に制限し、「話す」技能を高めるという活用方法もあります。通信の相手や使い方の組み合わせ次第で様々な活用ができます。

「個別学習ツール」としてのICT活用

コミュニケーションを豊かにするための活用方法とは別に、英語学習に必要な知識及び技能の習得に特化したICT活用の方法もあります。例えばAIなどを活用することで、子どもた

ちの英語のスキルを客観的に分析し、そこから得られたフィードバックをもとに、子ども自らが自身の英語を捉え直すこともできます。また、音声教材を用いたShadowingや挿絵・写真などを活用した即興的なStory作りなども、それにあたります。無論、こういった「個別学習ツール」としてのICT活用の中でも、当然子どもたち同士での学び合いが生まれることはあります。子ども同士で言語的な気づきや疑問を出し合い、そこから文法的なルールなど、さまざまな事柄に自分たちの力でアプローチしていくことは、知識や技能を習得する上で、とても重要な要素の一つなのです。

ICTを活用して、子どもの学びが深まる 授業・単元設計を

ご紹介してきた通り、外国語活動や外国語科の授業において、ICTは様々な場面で活用することができます。しかし、ICTを使うことを目的にしてしまっただけでは本末転倒です。大切なことは、教師が子どもたちにどのような力を身につけさせたいか、明確なビジョンを持って授業づくりや単元構成をするという最も本質的な部分であると私は考えます。その上でICTを活用するのに適した場面を吟味し、時としてご紹介してきたICTの使い方を目的に応じて組み合わせることで、今までの授業の概念に捉われない、とても創造的で、子どもたち自身で学びを深められる授業を構築することができるようになります。そして、そのような授業を経験してきた子どもたちの視野もまた広がり、自分に適した学びの方法を模索しながら、創造性を発揮して学びをアウトプットできるようになっていくのです。